

# 香川の遺跡から

## きしのうえ いせき 岸の上遺跡 (丸亀市飯山町下法軍寺)

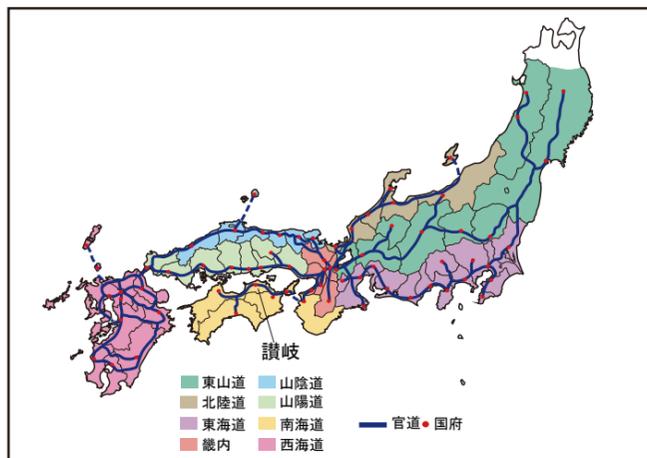
丸亀市飯山町下法軍寺にある岸の上遺跡を紹介します。この遺跡の調査では古墳時代後期の竪穴建物群や古代の大型倉庫群が見つかり、貴重な成果を得られました。ここでは南海道の両側を限る側溝の調査を取り上げます。

南海道は8世紀初頭に朝廷により整備された官道の一つです。7世紀末から進められた律令体制の整備の一環で、宮都と地方支配の拠点である国府を緊密・迅速に結ぶため、七つの官道を整備しました。ルート上には、概ね三十里(約16km)に駅家を設置し、定められた頭数の馬が常備されました。南海道はその一つで、宮都から和歌山、淡路島を通り、四国に通じるルートです。

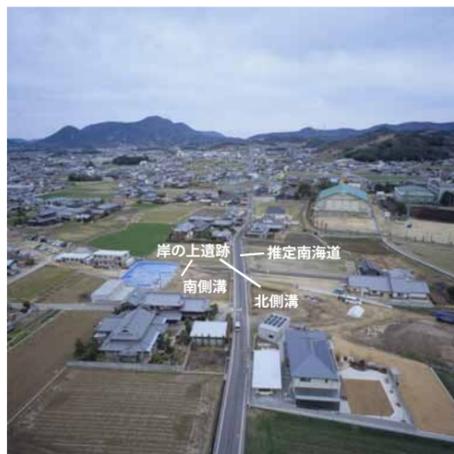
岸の上遺跡は、現在の市道により南北に分断されていますが、歴史地理学の成果から、その市道が南海道に想定されており、発掘調査前から、道の両側を限る側溝の検出が期待されました。

発掘調査の結果、市道の北側で2条と南側3条、重複・近接して、現市道に沿う溝群が見つかりました。位置をわずかに変えながらも役割を維持したことがうかがえます。出土遺物は少なかったものの、概ね8世紀前半頃と考えられ、南海道設置の時期とも概ね整合し、南海道の側溝と考えられます。両側の側溝とも、現市道の下部へ延びるため正確な幅は不明ですが、溝の芯々間で概ね8.5～9mが想定されます。

現在も生活道路として利用される市道が古代南海道をルーツに持つことが発掘調査により明らかになり、貴重な成果となりました。(山元素子)



▲五畿七道



▲岸の上遺跡遠景 (東から)



▲古代南海道側溝 (上から)



▲南側側溝 (東から)



香川県埋蔵文化財センター

〒762-0024 香川県坂出市府中町字南谷5001-4

tel. 0877-48-2191 fax. 0877-48-3249

<https://www.pref.kagawa.lg.jp/maibun/maibun/index.html>



▲香川県立高松西高等学校・香川県埋蔵文化財センター連携事業高校生を対象とした文化財保護を担う人材育成講座 平木1号墳 (高松市)



▲テーマ展「丸亀城跡(大手町地区)の発掘調査—城下町と武家屋敷」のポスター作り (香川県庁インターンシップ)

いにしへの  
讃岐

香川県埋蔵文化財センター情報誌

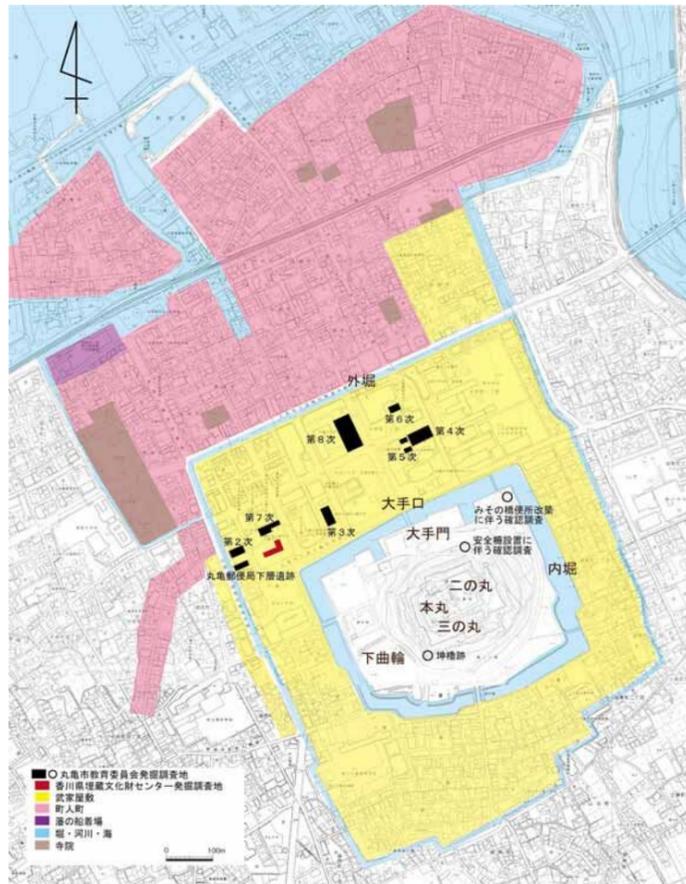
NO.118

# 丸亀城跡（大手町地区）の発掘調査 一城下町と武家屋敷一

令和6年9月17日～令和7年1月17日 香川県埋蔵文化財センター 第1展示室

いこまかまさ  
生駒親正は慶長2年(1597)西讃岐の拠点として亀山に築城し、丸亀城と名付けました。しかし、元和元年(1615)に一国一城令が出され、支城である丸亀城は取り壊されました。生駒家の改易後、讃岐国は二分され、西讃岐には山崎家治やまざきいえはるが入り、丸亀藩が成立しました。山崎氏は寛永20年(1643)城の再建に着手しましたが、わずか17年で改易されました。代わって万治元年(1658)に京極高和きょうごくたかかずが入り、城の再建は引き継がれました。生駒氏の時代から城の周辺には城下町が築かれ、山崎氏・京極氏も城下町をおいてちようちく発展させました。

近年、城下町の中でも武家屋敷地に当たる丸亀城跡(大手町地区)で、丸亀市教育委員会や香川県埋蔵文化財センターが発掘調査を行いました。この展示ではこれらの調査で明らかになってきた武家屋敷の姿を紹介します。



▲丸亀城跡と丸亀城下町跡の復元と主な発掘調査地

丸亀市都市計画図の一部を使用。「丸亀城郭及び城下町古地図」(丸亀市立資料館所蔵)をもとに作成した19世紀初頭ごろの城下町図(「史跡丸亀城跡保存活用計画」令和3年 に掲載)を参考に作成



▲「丸亀城郭及び城下町古地図」(丸亀市立資料館所蔵)

写真提供：丸亀市立資料館



▲高松地家裁丸亀支部庁舎新営工事に伴う調査地



## 生駒期から山崎家の武家屋敷跡

生駒期は慶長2年(1597)～寛永17年(1640)に当たります。生駒期の城下を描いた絵図資料は見つかっていないため、町割り不明ですが、内堀に近い大手町地区は山崎期同様、武家屋敷地になっていたと考えられます。大手町地区のほぼ中央に位置する第2～4次調査地(丸亀市教育委員会調査)では生駒期の遺構・遺物が見つかりました。このことから、城の北には生駒期の城下町が広がっていたことがわかりました。

山崎期は寛永18年(1641)～明暦3年(1657)の17年間です。高松地家裁丸亀支部庁舎新営工事に伴う調査地(香川県埋蔵文化財センター調査)では、山崎期の土坑が見つかり、肥前産の陶磁器や土器などの破片が多量に出土しました。この土坑は廃棄物を埋めるために掘られたもので、出土した陶磁器片などはこの付近に住んでいた武士が使っていたものと考えられます。

左：山崎期の土坑(高松地家裁丸亀支部庁舎新営工事に伴う調査)から出土した陶磁器17世紀中ごろ 左上は備前(岡山県)産、その他は肥前(佐賀県・長崎県)産

右：山崎期の土坑



▲丸亀城跡(大手町地区)第3次調査地 北から写真提供：丸亀市教育委員会

## 京極期の武家屋敷跡

大手町地区の中でも西部に位置する高松地家裁丸亀支部庁舎新営工事に伴う調査地も京極期の武家屋敷地です。城下町の絵図から、200年ほどの間に少なくとも3回の屋敷替えがあったことがわかっています。

発掘調査で最も多く見つかった遺構は土坑です。17世紀後半から幕末までのもので、陶磁器片などが多量に出土しました。これらは廃棄物を埋めたゴミ穴です。瓦片も多く出土していることから、屋敷替えに伴う建物解体時のゴミを一括廃棄するために掘られたものもあると考えられます。

江戸時代が終わり、明治7年(1874)には丸亀城の北側一帯に帝国陸軍の丸亀営所が置かれ、調査地付近は兵営になりました。幕末ごろの陶磁器片が多量に入った土坑は営所建設に伴って武家屋敷を解体した際の廃棄物を埋めるために掘られたものでしょう。

京極期を通じて掘られたこれらのゴミ穴からは肥前産や瀬戸美濃産などさまざまな産地の陶磁器が出土しました。これらの陶磁器の中には実用品以外に、金色で装飾された「霞晴山」の印銘をもつ京焼の瓶や、三色の釉薬で彩られた優美な源内焼、非常に高価な紅である「笹紅」の容器などがありました。江戸時代の武士は質実剛健を美風としていた一方で、華やかな陶磁器や化粧品などを所持し、生活を楽しんでいた様子がうかがわれます。(森下友子)

## 源内焼

源内焼は型を用いて器を整形し、繊細な浮彫模様を施した華やかな陶器で、江戸時代後半に平賀源内の指導を受けて発展しました。寒川郡志度で生まれた源内は長崎に留学し、中国南部で生産されていた交趾焼の技術を学びました。故郷に戻った源内は新しい施釉陶器の製作を指導し、産業振興を図りました。

## 霞晴山

京焼の一種と考えられていますが、江戸四谷で18世紀末に焼かれたものという説もあります。

## 笹紅

笹紅は玉虫色に輝く紅です。化政期(1804～1830)に流行しましたが、高価なもので、庶民には購入できるものではありませんでした。



▲磁器碗 京極期 19世紀前半 笹紅の容器です。「大坂新町於笹紅」と書かれており、高台付近には紅が付着しています。



▲高松地家裁丸亀支部庁舎新営工事に伴う調査地から出土した陶磁器 いずれも京極期 18世紀後半～19世紀前半

写真左下が源内焼皿、写真中央右よりが「霞晴山」の印銘をもつ瓶。この瓶は六角形で、角には金彩があります。